

令和元年6月14日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04449

研究課題名(和文) パフォーマンス評価により他者との関係構築思考を指導評価する社会科ワークシート開発

研究課題名(英文) Social Studies Worksheet Development for Teaching and Evaluating Relationship Building Thinking with Others by Performance Assessment

研究代表者

豊島 啓司 (Toyoshima, Keiji)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90380378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、現実的かつ主体的な探究が求められるパフォーマンス評価をもとに、社会科で育成すべき市民的資質である「他者との関係構築的思考」の指導と評価を一体化する授業改善のための社会科ワークシートを開発することである。具体的には、県内小中学校でのワークシート収集及び授業者へのアンケート調査、パフォーマンス評価によるワークシート指導評価事例開発、開発事例の授業実践による効果検証を実施した。研究成果として、(1)となる枠組みの明確化、(2)パフォーマンス課題と真正な学び論の結節、(3)社会科のレリバンスとしての市民的挑戦要件、(4)市民的挑戦要件による真正な学びの類型化等、実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最終的な成果は、(1)社会科パフォーマンス課題における真正性を学習機能調整要件のみに抛らず、市民的挑戦要件の「波及効果・影響力」及び「責任」から捉えたこと、(2)市民的挑戦要件としての真正性の類型及び段階を明らかに区分したこと、(3)社会科のパフォーマンス課題における現実の文脈としての真正性を段階ごとに方略化し、実践レベルでその実践可能性を明らかにしたことである。真正な学びのパフォーマンス課題の提示から始める「深い学びの学習 主体的+対話的」への発想転換が急務であると同時に、それこそが、社会科が真に「社会に開かれた教育課程」の核として蘇生、存命し得る鍵になることを提示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is the teaching of “thinking relationships with others”, which is an important citizenship to be fostered in social studies, based on Performance Assessments that require a realistic and independent inquiry. It is to develop a social studies worksheet for class improvement which unites teaching and assessment. Specifically, we analyzed a worksheet collection in elementary and junior high schools in Fukuoka prefecture and a questionnaire survey to the students, worksheet guidance evaluation case development by performance tasks, and effect verification by class practice of development cases. As research results, (1) Clarification of the underlying framework, (2) Linking performance tasks with Authentic Achievement theory, (3) Citizen's challenge requirements as a social studies's relevance, (4) Typographicalization of Authentic Achievement by citizen's challenge requirements, Revealed empirically.

研究分野：社会科教育

キーワード：市民的資質 関係構築思考 パフォーマンス評価・課題 真正な学び レリバンス 学習のための評価  
市民的挑戦要件

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 「なぜ、『他者との関係構築的な思考の指導と評価を一体化』か？」

それは、社会科で育成すべき「市民的資質」の評価方法が明確にされておらず、「用語の暗記」から抜け出せていないからである。社会科での「他者との関係構築的な思考」の評価方法は確立しておらず、「指導と評価の一体化」は放置状態であり、焦眉の急である。

(2) 「なぜ、パフォーマンス評価によるワークシートか？」

授業改善を具現化する評価・指導方法として、効率性、支援性、評価性の3点からワークシートは極めて有効と考える。近年の教育評価研究では、「真正の評価」と並んで「学習のための評価」が指摘される(石井,2011)。ワークシートは、まさに結果の見とりから途中の調整へ、評価から指導の改善へのカリキュラム・マネジメントが可能な学習材である。

現下、アーギュメントとしての思考研究(富田・丸野, 2004)が注目される。「対話」や「伝達」など「他者」との相互作用を前提とする関係構築的な思考が目指され、単に「何かを知っていること」ではなく、それを活用して「何かをできるようになること」から学力を捉えようとするパフォーマンス評価が前提とされる(育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会— 論点整理— 平成26年3月31日)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現実的かつ主体的な探究が求められるパフォーマンス評価をもとに、社会科で育成すべき最も重要な市民的資質である「他者との関係構築的な思考」の指導と評価を一体化する授業改善のための社会科ワークシートを開発することである。

3. 研究の方法

- (1) ワークシート収集及び授業参観記録, 授業者へのアンケート・インタビュー調査をする。
- (2) パフォーマンス評価により「他者との関係構築的な思考」指導・評価するワークシート枠組みを明示する。
- (3) ワークシート事例を開発するとともに実践を通して成果を検証する。

4. 研究成果

(1) 基盤となる枠組みの明確化

表 1. 「他者との関係構築的な思考」育成の基盤フレームワーク (筆者ら作成)

足場かけされた知識統合 (a) 科学を利用可能に (b) 思考を可視化 (c) 他者から学ぶことへの援助 (d) 自律生涯学び続けることの促進						
デザイン	アプローチ	関係構築的社会的知識形成枠組み「かかわり」(DoL)	足場かけ方略	パフォーマンス課題		ルーブリック 学習自己管理・調整の要素
				文脈/レリバンス	他者/協働	
意味形成 / プロセス管理 / 省察と明示化	① 動機づけ	○学習課題としての社会事象提示 [状況性]  ・因果関係の説明、目的行為関連の解釈、価値選択、政策選択、妥協・調整 (次元1・2)	[方略①] 動機づけ ・他者と関わる学習活動への参加・完遂 ・論争問題についての価値・政策の選択 [方略②] 前提となる思考方法 ・演繹的思考 ・帰納的思考 ・仮説的推論思考	<b>文脈化</b> : 学びへの接近・促進 ・大人の文脈を模写 ・子どもらの現実世界への挑戦感触 ・学校を超える価値 (真正学力③) ・本質的な問い (パフォ課題要素1) 日常生活と科学知の結節 (文脈化→脱文脈化→再文脈化への導入)  <b>脱文脈化</b> : 事実関係の科学化 ・原理と一般化 (パフォ課題要素2) ・事実関係としての概念的知識習得 ・知識の構成 (真正学力①) ・鍛錬された探究 (真正学力②)  <b>巨文脈化</b> : 判断のための理解の活用 《意思決定タイプ》 A. 表現創作活動への活用…歴史新聞を作ろう! 啓発ポスターを作ろう! (表現の手立ての意思決定) B. 価値判断への活用…○すべいか? (いわゆる意思決定型の課題) b1: 自己にかかわる個人的な判断か (自己調整) 【次元3】 b2: よりよい社会をつくる公的な判断か (公的論争) 【次元4】 イ) 眼前の行為の選択か (特定状況の問題解決) ロ) 法律などルールやコードの選択か (公共圏の構築) ハ) 事実認識の仕方・内容としてどちらを選択するか (…観の共有) ・事実関係である概念的知識の活用 ・直接に学習してない他事象に適用する概念活用 ・既習事象に新情報を加味する総合・統合としての概念の再構成 ・永続的理解 (パフォ課題要素3)	・協働的で深い探究を要するものか ・対立と合意, 効率と公正 ・幸福/正義/公正 ・法やルール	・意思決定や問題解決課題への接近による動機付けと目標の我有化 ・目標と学び手自身との距離認知 ・その距離を縮めるためにはどうするか把握 (アプロブレーション1)
	② 知識構成	○社会事象についての個別的・具体的説明/解釈 [関連性] [他者性]  ・個別的・具体的因果関係の説明 ・個別的・具体的目的=行為関連の解釈 (次元3)	[方略③] 空間の確定 ・位置 (偏在, 点在等) ・広がり・つながり [方略④] 時間の確定 ・経過/経緯/変化 (順序, 間隔, 影響等) [方略⑤] 適合概念選択 ・どのタイプ (概念) か? [方略⑥] 適合事象選択 ・どれが要素か?	<b>巨文脈化</b> : 判断のための理解の活用 《意思決定タイプ》 A. 表現創作活動への活用…歴史新聞を作ろう! 啓発ポスターを作ろう! (表現の手立ての意思決定) B. 価値判断への活用…○すべいか? (いわゆる意思決定型の課題) b1: 自己にかかわる個人的な判断か (自己調整) 【次元3】 b2: よりよい社会をつくる公的な判断か (公的論争) 【次元4】 イ) 眼前の行為の選択か (特定状況の問題解決) ロ) 法律などルールやコードの選択か (公共圏の構築) ハ) 事実認識の仕方・内容としてどちらを選択するか (…観の共有) ・事実関係である概念的知識の活用 ・直接に学習してない他事象に適用する概念活用 ・既習事象に新情報を加味する総合・統合としての概念の再構成 ・永続的理解 (パフォ課題要素3)	・協働的で深い探究を要するものか ・対立と合意, 効率と公正 ・幸福/正義/公正 ・法やルール ・対話的交渉 (説得的説明) ・対話的交渉 (議論・討論)	・教師・学習者間での目標の共有化 ・目標の我有化・共有化及びそれに伴う現実的文脈としての挑戦感 (アプロブレーション2) ・意思決定や問題解決のための目標の再解釈 (モデレーション1)
	③ 知識の精緻化・深化	○社会事象についての概念的・一般的説明/解釈 [関連性] [他者性]  ○それらを活用し社会参加にむけた価値選択 [関連性] [状況性] [他者性] ・個人的意思決定や合意形成 (次元4・5)	[方略⑦] 一般的説明・解釈 ・適合概念説明 ・根拠を明示した未来予測 [方略⑧] 価値選択 ・個人的意思決定 ・反論を想定した主張の構成・修正・合意形成 [方略⑨] タイプに類型化 [方略⑩] 視点の多様化・視座の転換による認識・判断の再構成 [方略⑪] 他者への対話的説明・議論 ・異なる認識や判断, その選択	<b>巨文脈化</b> : 判断のための理解の活用 《意思決定タイプ》 A. 表現創作活動への活用…歴史新聞を作ろう! 啓発ポスターを作ろう! (表現の手立ての意思決定) B. 価値判断への活用…○すべいか? (いわゆる意思決定型の課題) b1: 自己にかかわる個人的な判断か (自己調整) 【次元3】 b2: よりよい社会をつくる公的な判断か (公的論争) 【次元4】 イ) 眼前の行為の選択か (特定状況の問題解決) ロ) 法律などルールやコードの選択か (公共圏の構築) ハ) 事実認識の仕方・内容としてどちらを選択するか (…観の共有) ・事実関係である概念的知識の活用 ・直接に学習してない他事象に適用する概念活用 ・既習事象に新情報を加味する総合・統合としての概念の再構成 ・永続的理解 (パフォ課題要素3)	・協働的で深い探究を要するものか ・対立と合意, 効率と公正 ・幸福/正義/公正 ・法やルール ・対話的交渉 (議論・討論) ・対話的交渉 (語り合い) ・対話的交渉 (説得的説明)	・複数観点から統合的か ・アンカーの明示と把握 ・目標と学び手自身との距離認知 ・その距離を縮めるためにはどうするか把握 (アプロブレーション3) ・意思決定や問題解決のための目標の再解釈 (モデレーション2) ・自らの意思決定や問題解決を学習後も継続的に問い深め、学び続ける拘りや意味の把握 (コミットメント)

まず1点目の成果は、「裸の王様」問題に関わって、指導の結果(アウトプット)に留まらず、学習の成果(アウトカム)の視点から、市民的資質の学習指導と評価を一体化する枠組みを実証的に明らかにすることができた(表1)。これらLCDの「足場かけ」と豊畠による社会科「かかわりの知」を統合した枠組みに前述の着眼点を反映させ、「他者との関係構築的な思考」育成の基盤となる枠組みとして再構築した。

(2)パフォーマンス課題と真正な学び論の結節

社会科は市民的資質までを目標の射程としてきた教科であり、その評価においては、パフォーマンス評価が適するとされる。とはいえ「パフォーマンス課題＝真正な学びの課題」ではない。パフォーマンス課題が、学び手の日常生活と乖離、あるいは過度に難解であり、その解決には、自己本位のファンタジー(幻想)又は他人事のアカデミック(学術)、いずれか極端な立場で、市民的資質に反する学習をせざるを得なくなる「教室のファンタジー」問題は、パフォーマンス課題に、学び手目線からのレリバンスとして真正性が担保されないことに起因して発生することを指摘した。パフォーマンス課題を社会科で用いる目的は、教科書記述に留まらず、現実世界に目を開き、試行し、行動しようとする「真正な」市民的資質を育成することである。よって、社会科学習におけるパフォーマンス課題は、同時に真正な学びの課題でなければならない。社会科学習でレリバンス、とりわけ「真正性」を市民的資質育成の文脈で初めて論じたのはニューマンらであり、①知識の構成(construction of knowledge)、②鍛錬された探究(disciplined inquiry)、③学校を超える価値(value beyond school)の三規準から「真正の学び(authentic achievement)」概念を提示したり。社会科における真正の学びとして、とりわけ、「学校を超える価値」を射程に、他者を前提とする「言説」としての市民的資質を育成すること、ここに社会科のレリバンスを捉え、パフォーマンス課題に反映させることが、真正な学びの課題のレベルを高めていくうえで極めて肝要であることを指摘した。

(3)社会科のレリバンスとしての「市民的挑戦要件」

一般教育学におけるパフォーマンス課題の先行研究は、ウィギンズらの真正の学習論的な特徴に代表されるように、いわゆる

パフォーマンス課題が「複合的な技能や能力を用いる課題」として、学習者が主体的に学び進める機能を要件(以下、「学習機能調整要件」と呼ぶ)に重点を置いて特徴づけられる。これに対して、ニューマンによる真正の学び論で目指される言説による共同体構築は、まさに遠藤が欠



図1. 市民的挑戦要件としての真正性の類型

落を指摘する「現実世界に挑戦している」感触を伴って、市民としていかに立ち向かうかの政治的要件(以下、「市民的挑戦要件」と呼ぶ)に区分できよう。つまり、学び手自身が自ら、ひと・もの・こと(とりわけ、ルール・コード等の制度)について「かかわり(relation)」を捉え、それに対して「かかわる(concern)」かが重視されたパフォーマンス課題である。より直接的に「かかわり(relation)」を捉え、それに対して「かかわる(concern)」市民的挑戦要件から、社会科におけ

表2. 市民的挑戦要件による真正な学びの段階

非常に高い (レベル4)	①実社会・実生活そのものを捉えた状況として、 ②子どもの意識の流れを大切に動機付けとなっており、 ③習得した概念、知識、技能及び価値観等を活用し得る課題になっており、 ④ <b>波及効果や影響が大きい</b> パフォーマンスが設定されており、 ⑤個人・市民としての <b>責任が大きく課される</b> 。
やや高い (レベル3)	①実社会・実生活そのもの又はそれに近い状況として、 ②子どもの意識の流れを大切に動機付けとなっており、 ③習得した概念、知識、技能及び価値観等を活用し得る課題になっており、 ④ <b>波及効果や影響がそれほど大きくない</b> パフォーマンスが設定されており、 ⑤個人・市民としての <b>責任が大きく課される</b> 。
やや低い (レベル2)	①実社会・実生活に近い状況又はかけ離れた状況として、 ②子どもの意識の流れを大切に動機付けとなっており、 ③習得した概念、知識、技能及び価値観等を活用し得る課題になっており、 ④ <b>波及効果や影響が大きい</b> パフォーマンスが設定されており、 ⑤個人・市民としての <b>責任がそれほど大きく課されない</b> 。
低い (レベル1)	①実社会・実生活とかけ離れた状況として、 ②子どもの意識の流れを大切に動機付けになっ ておらず、 ③習得した概念、知識、技能及び価値観等を活用し得る課題になっ ておらず、 ④ <b>波及効果や影響がそれほど大きくない</b> パフォーマンスが設定されて おり、 ⑤個人・市民としての <b>責任がほとんど課されない</b> 。

※ ①状況・文脈、②学習者主体の動機付け、③概念等の活用、④効果影響、⑤責任、の各要素からなる。(筆者作成)

る真正の学力、とりわけ、「学校を超える価値」を射程に市民的資質を育成することが肝要である。筆者らは市民的挑戦要件としての真正性を担保するための2つの要素を抽出した。まず、1つ目は、「決断」により「現実をつくり出す」こと。つまり、学習者の意思決定又は問題解決方略に「波及効果・影響力 (Effects)」が生じるような課題であること。そして、2つ目は、「本人の自由にならない選択」より、学習者の意思決定又は問題解決方略は他者に対する「責任 (Responsibility)」を考慮する必要がある課題であること。この2要素から、社会科の真正性をレリバンスとして捉え、パフォーマンス課題に反映させる必要がある (図1)。

表3. パフォーマンス課題の方略と真正性レベル

手立て・方略 [子どもへの提示]	文脈・状況	真正性レベル 市民的挑戦要件	レリバンス
(1) 学び手にとって <b>真に真正の課題</b> [全ガチ]	真に自分ごととして他に働きかける又は対処すべき状況	レベル4 効果：大 責任：大	即自的意義 現在
(2) 課題解決のための <b>真正な手続き</b> [半ガチ]	大人社会の難題について、他に働きかけ又は対処の手続きを詳細に模写した、職能形成・成長にもつなげる状況	レベル3 効果：小 責任：大	職業的意義 将来
(3) 学び手との <b>真正な近さ</b> [ややガチ]	物理的な距離や心情的な近さを伴い、感情移入、自己投入が容易かつそう働きかける又は対処せざるを得ない状況	レベル2 効果：大 責任：小	市民的意義 現在・将来 近隣の事象 生活世界 所属社会 利害共有 市民として生きる 上での道具

※レリバンスについては、以下、本田の区分を参考にした。  
本田由紀『若者と仕事』東京大学出版会、2005年、150頁。

(4) 市民的挑戦要件による真正な学びの類型化 (類型と段階)

社会科での市民的資質育成において、市民的挑戦要件を課題の基盤に据える場合、パフォーマンスが内包する「波及効果・影響力 (Effects)」と「責任 (Responsibility)」から捉える必要があり、この2要素は不可欠といえよう。少なくとも、市民的挑戦要件のレベル2を越え、真正性を担保したパフォーマンス課題の構想こそが、社会科での市民的資質育成において急務と考える (表2)。

(5) 真正な学びとしての社会科パフォーマンス課題

教室のファンタジー問題を克服するための具体的な手立て、つまり、真正な学びとしての社会科パフォーマンス課題として、前述した市民的挑戦要件による真正性の類型・段階を踏まえ、表3に示す3つの方略を考えている。パフォーマンス課題設定の手立て・方略における段階「真に真正」/「真正な手続き」/「真正な近さ」は、それぞれ、表3のレベル4/レベル3/レベル2への対応を想定している。

図2. 学びの地図としてのワークシート例

2年生社会科セルフラーニングメジャー 地域の在り方-私たちと関門地域- 2年 (組) [ ]

この単元の学習で、自分の学びを自己評価しよう。

[パフォーマンス課題] 関門地域の地域的特色について説明する地理教科書を作成しよう!

記入日時: えんびつ 10月 23日 火曜日 | 時間目/赤 月 日 曜日 | 時間目/青 月 日 曜日 | 時間目

○現時点でのあなたの学習の進み具合を「2000m走」にたとえたら、今、何m地点を走っていますか? 緑 10/31 (X) 3時間目

スタート 1000m ゴール

それはなぜ、どのような理由からそう思うのですか?

関門地域の教科書を作るのに必要な情報が足りていないから。前回は何も進まなかった。情報が集まらず、あと資料をつけておいた方がいい。中核となる考察の視点が乏しく、教科書が完成しない。他のグループと意見交換したから。

他者の発言や、学びの姿から学んだことを記録しましょう。  
※「頑張っている」「元気がある」などではなく、課題達成や社会科学習としての良さを具体的に書きましょう。

調べた時に1つのサイトはわりといい。フリーワード以外の単語も調べていた。自分の身内からの情報とをセーブしていた。唐辛子市場→輪屋→産業→漁業 説明がわかりやすくして、おもしろくしていた。

ゴールするために必要なこと、次の時間にやるべきことはどんなこと(内容・方法)でしょうか?

具体的目標の目的をしよう。  
↳ 調べて他の視点と結びつける。  
教科書に書く内容を調べて構成を考えた。  
関門地域の漁業についての資料と情報。  
下関北九州道路についての情報。  
北九州→下関や下関→北九州には、ある産業  
他のグループの教科書を見て、意見を深める。(セーブまでには完成させる)  
関門地域の課題や改善方法について意見交換し、考えを深める。

(6) 類型3「真正な近さ」を課題とした社会科学習で用いたワークシート事例

本事例は、協力者による国立大学法人の附属中学校での実践である(図2、概要等は省略)。

(7) 結語

本研究の最終的な成果として、以下の3点を考えている。まず1点目は、社会科パフォーマンス課題における真正性を学習機能調整要件のみに抛らず、市民的挑戦要件の「波及効果・影響力」及び「責任」から捉えたことである。次に2点目は、市民的挑戦要件としての真正性の類型及び段階を明らかに区分したこと、そして、3点目は、これらをもとに、社会科のパフォーマンス課題における現実の文脈としての真正性を段階ごとに方略化し、実際の学習レベルでそれらの実践可能性を明らかにしたことである。

残された課題については、以下の2点を考えている。1点目は、真正性レベルがそこまで高くないパフォーマンス課題について、学習全般にわたる真正な学びとしてのレリバンスの保持である。2点目は、本小論で提示した、市民的挑戦要件による真正な学びの類型・段階を踏まえたパフォーマンス課題の学習について、より多く実践を蓄積し、社会科の「主体的・対話的・深い学びの学習」として、検証することにより、提案の精度を高めていく必要がある。

市民的資質育成のレリバンスにおいて、①学び手にとって真に真正の課題 > ②課題解決のための真正な手続き > ③学び手との真正な近さ…の段階性は、各課題間でかなり大きな隔たりがあると考えられる。多くの単元は①、②には該当せず、一般的な学習課題・スタイルでは、真正性を担保することも極めて難しい。よって、本小論での③真正な近さにより見出される課題の真正性は、小さくはあるものの、全ての社会科学習に真正性を担保することに繋がると考える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計11件)

- ① 柴田康弘, 自由な空間と時間で地域調査にチャレンジ, 教育科学社会科教育, 査読無, 723号, 2019, 印刷中
- ② 柴田康弘, ガちな問題リアルな社会との出会いを演出, 教育科学社会科教育, 査読無, 720号, 2019, 46-49
- ③ 柴田康弘, 中学校社会科公民的分野だからこそこの, よりリアル(真正)な授業と検証(授業研究)を!, 教育科学社会科教育, 査読無, 715号, 2018, 98-101
- ④ 柴田康弘, 他者性と状況性を埋め込んだ活用型テストを!, 教育科学社会科教育, 査読無, 713号, 2018, 74-75
- ⑤ 柴田康弘, 市民的挑戦としてのパフォーマンスを!, 教育科学社会科教育, 査読無, 705号, 2018, 62-65
- ⑥ 豊畷啓司, 柴田康弘, 社会科パフォーマンス課題における真正性の類型化と段階性の実践的検証, 社会科教育研究, 査読有, 135号, 2018, 14-26
- ⑦ 豊畷啓司, 社会科「パフォーマンス評価」の現状・問題・克服, 教育科学社会科教育, 査読無, 694号, 2017, 112-115
- ⑧ 柴田康弘, “あたり前”から「地域」の概念をつくる学習を, 教育科学社会科教育, 査読無, 700号, 2017, 86-89,
- ⑨ 豊畷啓司, 柴田康弘, アウトカムのための社会科市民的資質評価, 教育目標・評価学会紀要, 査読有, 26号, 2016, 41-51
- ⑩ 豊畷啓司, 柴田康弘, 概念活用の思考評価, 社会科研究, 査読有, 85号, 2016, 1-12
- ⑪ 小田泰司, コンピテンシー・ベイス・カリキュラムの内容編成と評価の実際, 初等教育カリキュラム研究, 査読有, 6号, 2016, 17-29

[学会発表] (計20件)

- ① 柴田康弘, 「真正な社会科学習で主権者を育てる」 2018年度日本教育大学協会社会科部門関東地区会・日本社会科教育学会共催シンポジウム, 林野会館(東京都, 文京区), 2019年3月
- ② 豊畷啓司, 小田泰司, 坂井清隆, 柴田康弘, 木下祥一, 学びを社会に開く社会科の学習デザインとは, 福岡社会科教育実践学会第10回研究発表大会シンポジウム, 福岡教育大学附属福岡小学校(福岡県, 福岡市) 2019年2月
- ③ 豊畷啓司, 坂井清隆, 柴田康弘, 三浦研一, 木下祥一, 福崎泰規, 汎用的な資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントのための予備的研究Ⅱ・先進的実践の長期的, 質的検証を通して, 教育目標・評価学会, 第29回研究大会, 和光大学(東京都, 町田市), 2018年11月
- ④ 柴田康弘, 真正な学びとしての社会科学習, 全国社会科教育学会, 第67回全国研究大会, 山梨大学(山梨県, 甲府市), 2018年10月
- ⑤ 豊畷啓司, 柴田康弘, 坂井清隆, 木下祥一, 三浦研一, 齋藤淳, 真に社会に開かれた学びで市民的資質を育成するためのカリキュラム・マネジメント・社会科の役割と限界, 全国社会科教育学会, 第67回全国研究大会, 山梨大学(山梨県, 甲府市), 2018年10月
- ⑥ 豊畷啓司, 坂井清隆, 柴田康弘, カリキュラム・マネジメントによるコンピテンス育成の長期的検証(Ⅱ) 談話分析による質的検証, 日本教育方法学会, 第54回大会, 和歌山大学(和歌山県, 和歌山市) 2018年9月
- ⑦ 柴田康弘, 社会科における市民的挑戦としての真正な学び, 福岡社会科教育実践学会, 第9回大会シンポジウム, 福岡教育大学附属福岡小学校(福岡県, 福岡市), 2018年2月
- ⑧ 小田泰司, コンピテンシー・ベイス・カリキュラムとその評価に関する研究, 初等教育カ

- リキュラム学会，第2回大会，広島大学東千田キャンパス（広島県，広島市），2018年1月
- ⑨ 豊島啓司，坂井清隆，柴田康弘，三浦研一，木下祥一，汎用的な資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントのための予備的研究，教育目標・評価学会，第28回研究大会，金沢大学（石川県，金沢市），2017年11月
- ⑩ 豊島啓司，柴田康弘，木下祥一，社会科パフォーマンス課題における真正性の問題と克服，全国社会科教育学会，第66回全国研究大会，広島大学（広島県，東広島市），2017年10月
- ⑪ 豊島啓司，柴田康弘，三浦研一，カリキュラム・マネジメントによるコンピテンス育成の長期的検証・社会科・道徳・総合的な学習を中心に，日本教育方法学会，第53回大会，千葉大学（千葉県，千葉市）2017年10月
- ⑫ 豊島啓司，坂井清隆，柴田康弘，木下祥一，市民的資質を育成する社会科パフォーマンス課題の実践的検討・米国のPBL理論を手がかりに，教育目標・評価学会，第27回研究大会，一橋大学（東京都，国立市），2016年11月
- ⑬ 豊島啓司，柴田康弘，木下祥一，市民的資質を育成する社会科パフォーマンス課題の検討，全国社会科教育学会，第65回全国研究大会，社会系教科教育学会第28回研究発表大会合同研究大会，兵庫教育大学（兵庫県，加東市），2016年10月
- ⑭ 豊島啓司，柴田康弘，現実の文脈から真正な市民的資質を育成する社会科パフォーマンス課題の実践的検討，日本教育方法学会，第52回大会，九州大学（福岡県，福岡市）2016年10月
- ⑮ 豊島啓司，柴田康弘，坂井清隆，パフォーマンス課題からみた意思決定型授業実践分析，社会系教科教育学会，第27回研究発表大会，鳴門教育大学（徳島県，鳴門市），2016年2月
- ⑯ 豊島啓司，柴田康弘，課題研究「学習科学」研究からの社会科省察，社会系教科教育学会，第27回研究発表大会，鳴門教育大学（徳島県，鳴門市），2016年2月
- ⑰ 豊島啓司，坂井清隆，柴田康弘，社会科実践におけるパフォーマンス課題の検討，教育目標・評価学会，第26回研究大会，京都教育大学（京都府，京都市），2015年11月
- ⑱ 豊島啓司，柴田康弘，概念活用の思考評価，全国社会科教育学会，第64回全国研究大会，広島大学（広島県，東広島市），2015年10月
- ⑲ 豊島啓司，社会科の市民的資質評価，第5回全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会研究交流，JR博多シティ会議室3（福岡県，福岡市），2015年8月
- ⑳ 柴田康弘，社会科実践をいかに伝えるか？，福岡社会科教育実践学会，第6回大会シンポジウム，西南学院小学校（福岡県，福岡市），2015年2月
- 〔図書〕（計3件）
- ① 柴田康弘，ヨーロッパ州「ユーロ」他，峯明秀編著『対話的深い学びを測る新授業の評価 新中学社会の定期テスト』，2017年11月，学芸みらい社，42，52-54，86，89，132，164，168
- ② 柴田康弘，第2章3「情報化社会ビッグデータ時代について考える」他，橋本康弘編『中学公民 生徒が夢中になる！アクティブ・ラーニング&導入ネタ80』，2016年7月，明治図書出版，20-23，50-55
- ③ 柴田康弘，第IV章 中国地方・四国地方「瀬戸大橋のストロー現象を説明してみよう」他，峯明秀編著『中学社会科“アクティブ・ラーニング発問”174』，2016年3月，学芸みらい社，41，51-53，86，89，134，166，170
- 〔その他〕 ホームページ…準備中

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

小田泰司 (ODA, Yasuji) 福岡教育大学・教育学部・教授 研究者番号：60452702

### (2)研究協力者

坂井清隆 (SAKAI, Kiyotaka)  
福岡教育大学・教職大学院・講師  
元重雄平 (MOTOSHIGE, Yuhei)  
福岡教育大学附属小倉中学校・教諭  
最所 健太 (SAISHO, Kenta)  
福岡教育大学附属福岡中学校・教諭  
山田 泰生 (YAMADA, Yasuo)  
福岡教育大学附属久留米中学校・教諭  
藤岡 太郎 (FUJIOKA, Taro)  
福岡教育大学附属福岡小学校・教諭  
井手 司 (IDE, Tsukasa)  
福岡教育大学附属福岡小学校・教諭  
三浦 研一 (MIURA, Kenichi)  
福岡市教育委員会・主任指導主事  
萱田 稔彦 (KAYATA, Toshihiko)  
宗像市立加東西小学校・教諭

柴田康弘 (SHIBATA, Yasuhiro)  
福岡教育大学附属小倉中学校・教諭  
土器 修 (DOKI, Osamu)  
福岡教育大学附属福岡中学校・教諭  
井上 正成 (INOUE, Masanari)  
福岡教育大学附属福岡中学校・教諭  
田口 和秀 (TAGUCHI, Kazuhide)  
福岡教育大学附属久留米中学校・教諭  
齋藤 淳 (SAIHOU, Jun)  
福岡教育大学附属福岡小学校・教諭  
木下 祥一 (KINOSHITA, Shoichi)  
福岡教育大学・教育学部・非常勤講師  
福崎 泰規 (FUKUZAKI, Yasunori)  
福岡県立修猷館高等学校・教諭

<sup>1)</sup> Archbald, D. A. & Newmann, F. M., 1988, *Beyond standardized testing : Assessing Authentic Academic Achievement in the Secondary School*, National Association of Secondary School Principals.